

身近な赤煉瓦

著者	水野 信太郎
雑誌名	北翔大学短期大学部研究紀要
巻	46
ページ	133-140
発行年	2008
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000749/

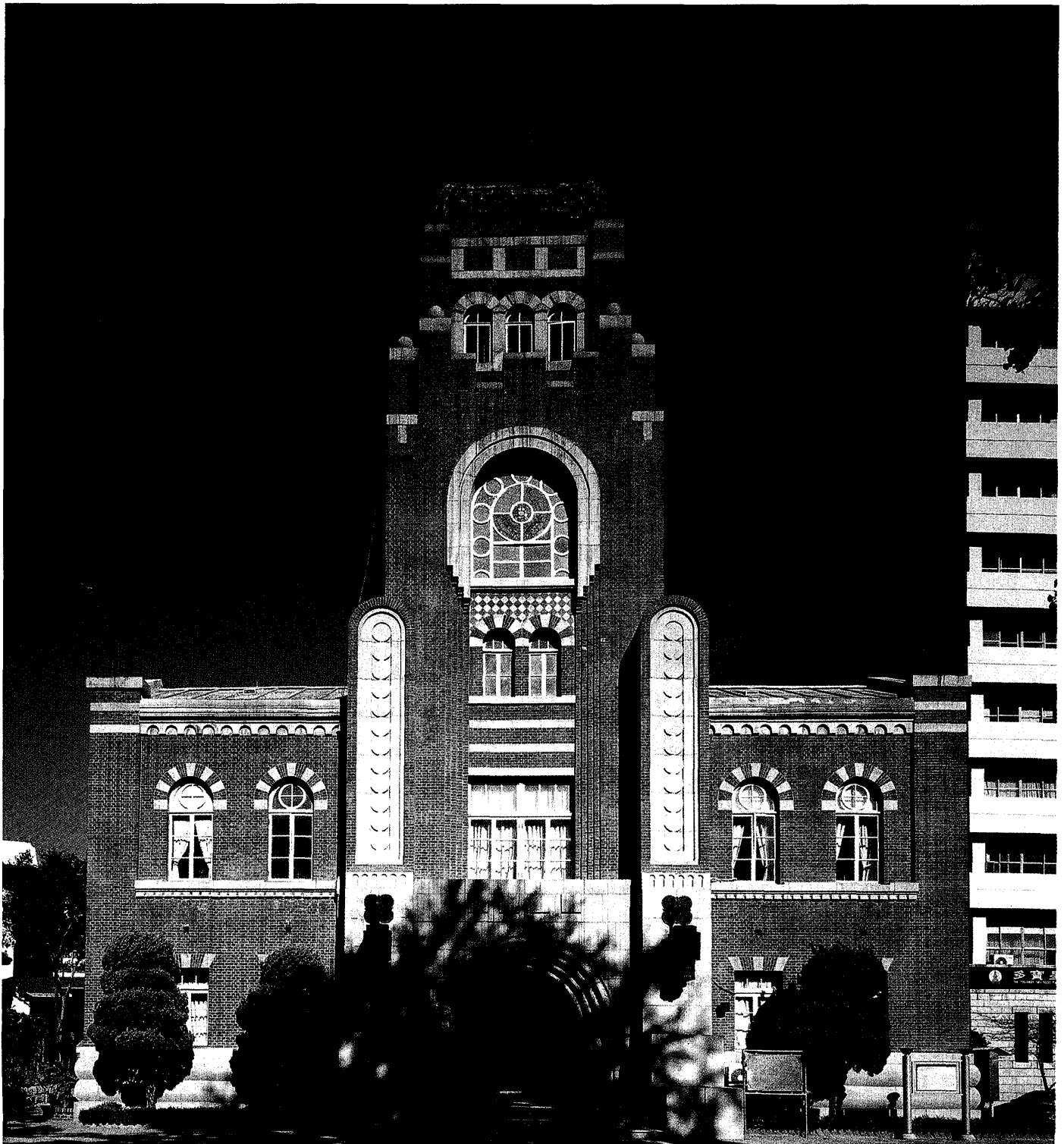
身近な赤煉瓦

The Bricks in Soul

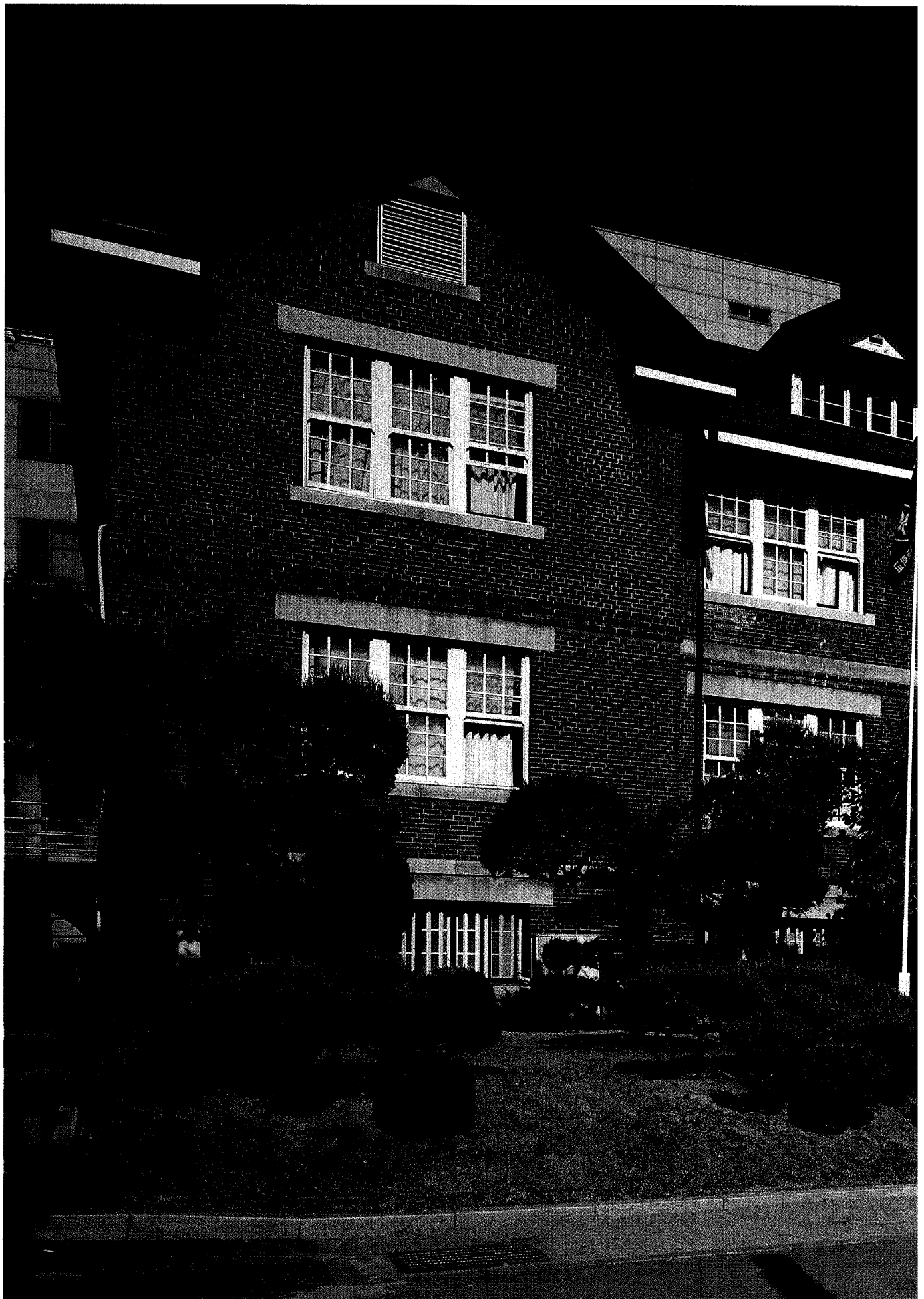
水 野 信 太 郎

Shintaro

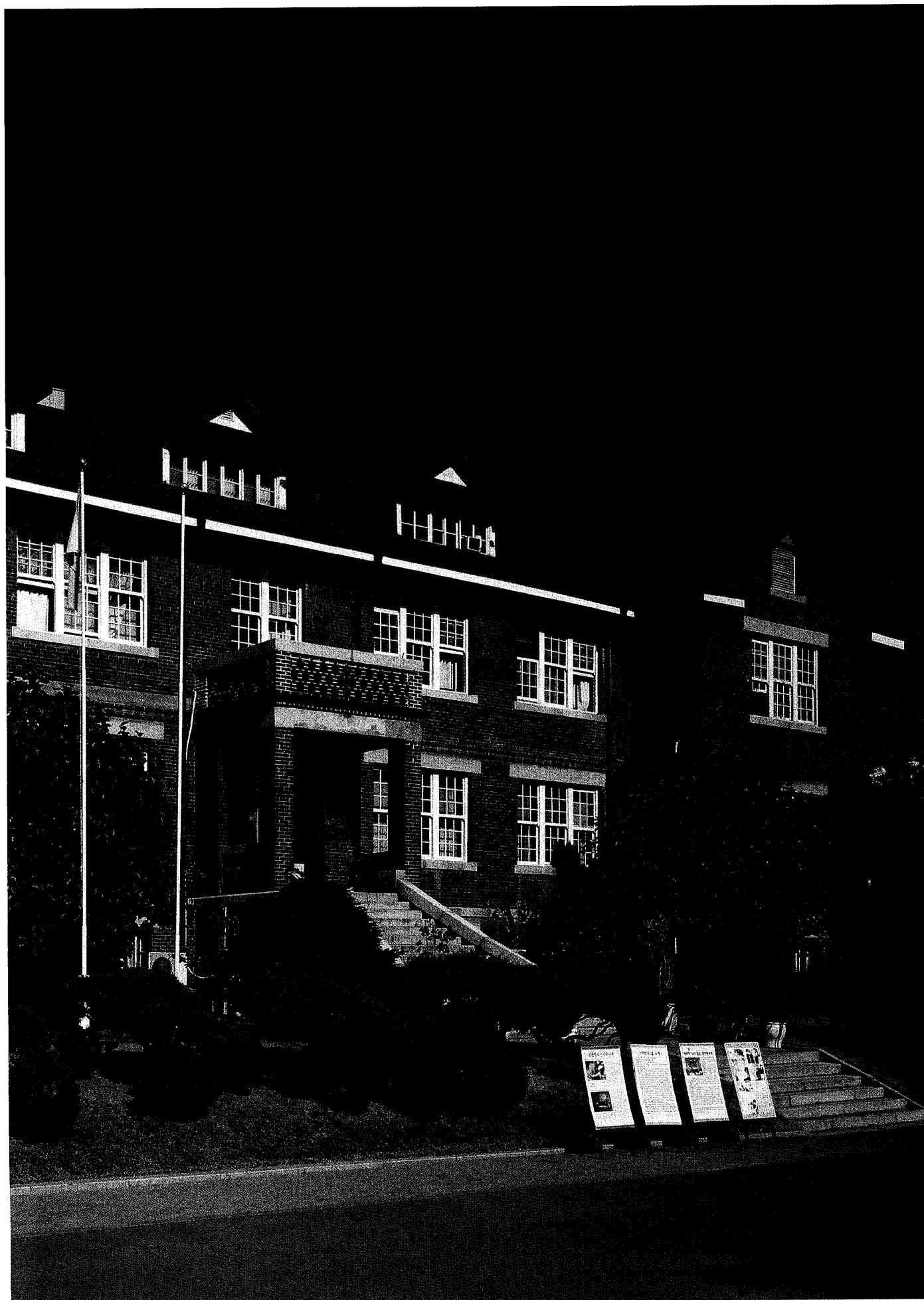
MIZUNO

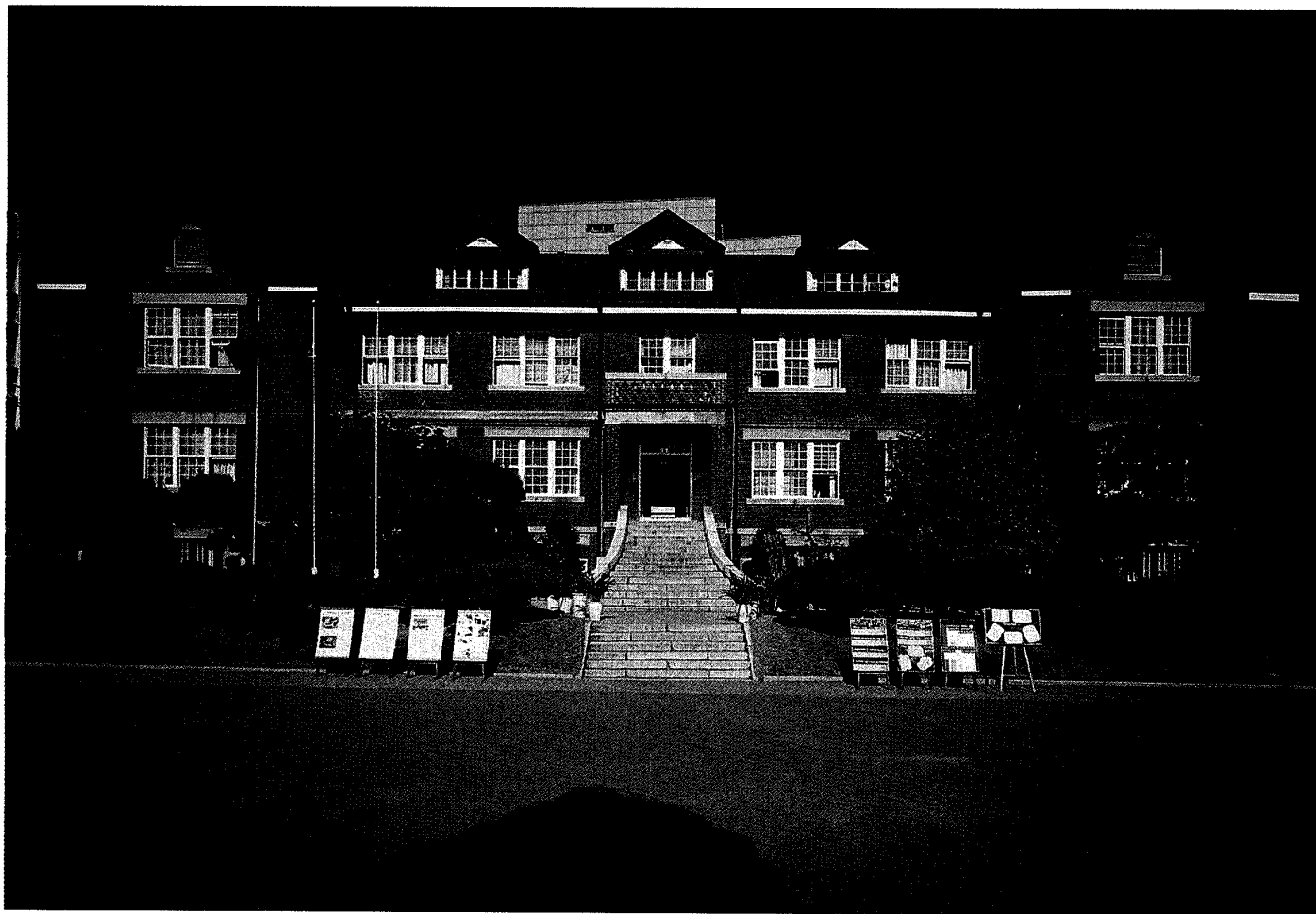


作品一 1 天道教中央大教堂の正面（妻面側）

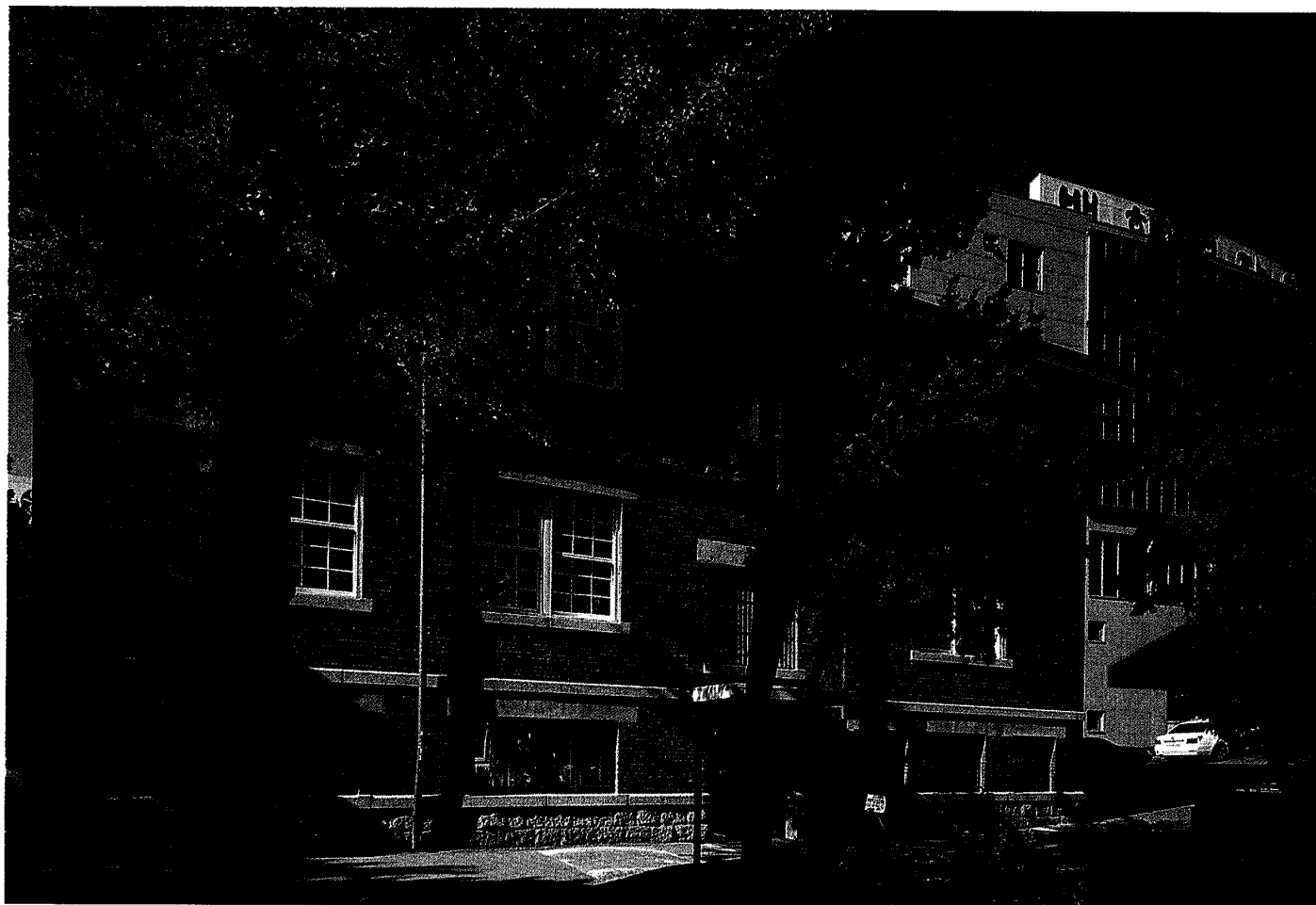


左口一ノ 校花女子十高女子高等学校会公呈

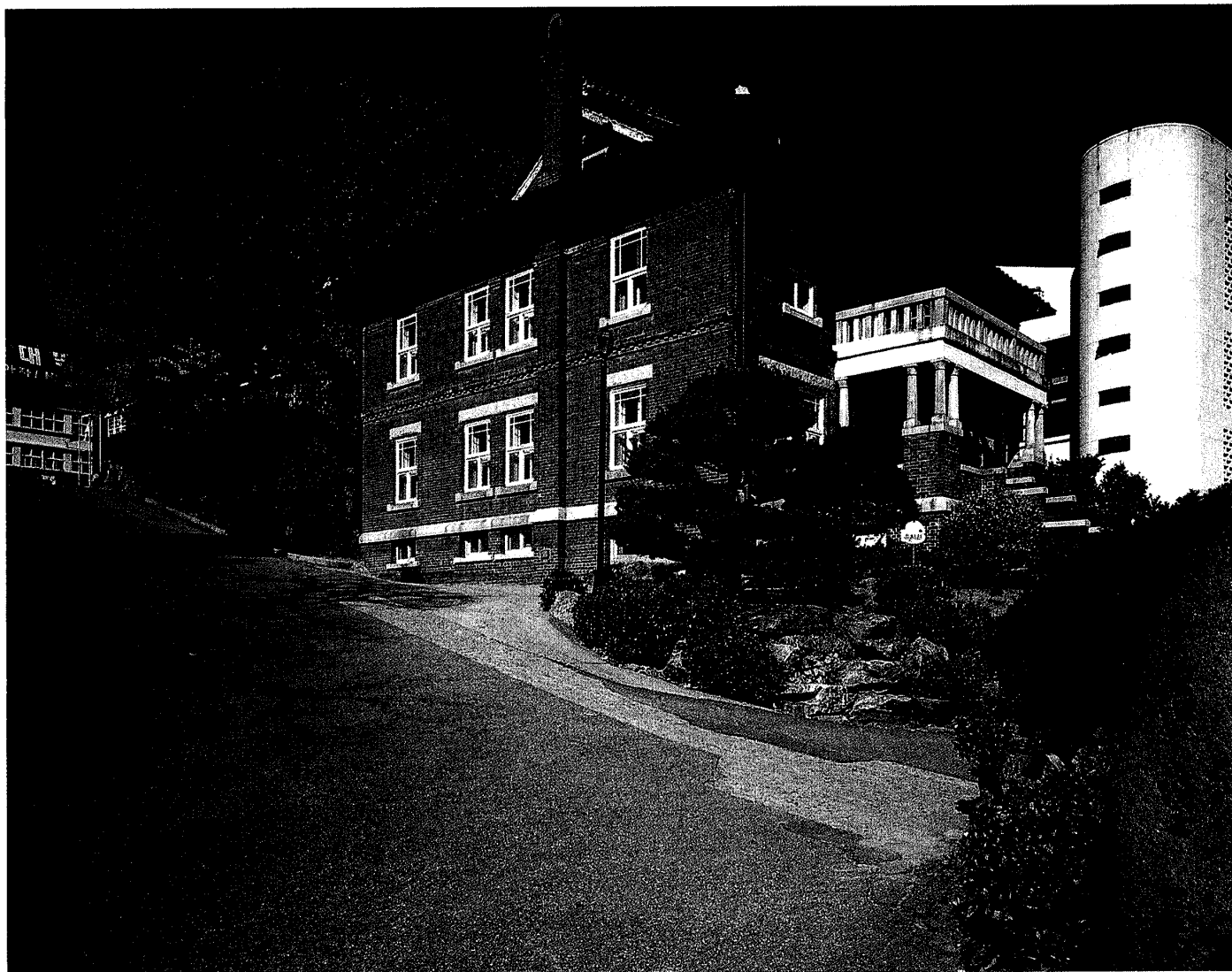




作品一 3 培花女子大学女子高等学校校舎正面



作品一 4 培花女子大学女子高等学校校舎側面



作品一 5 培花女子大学記念館全景（妻面と正面）



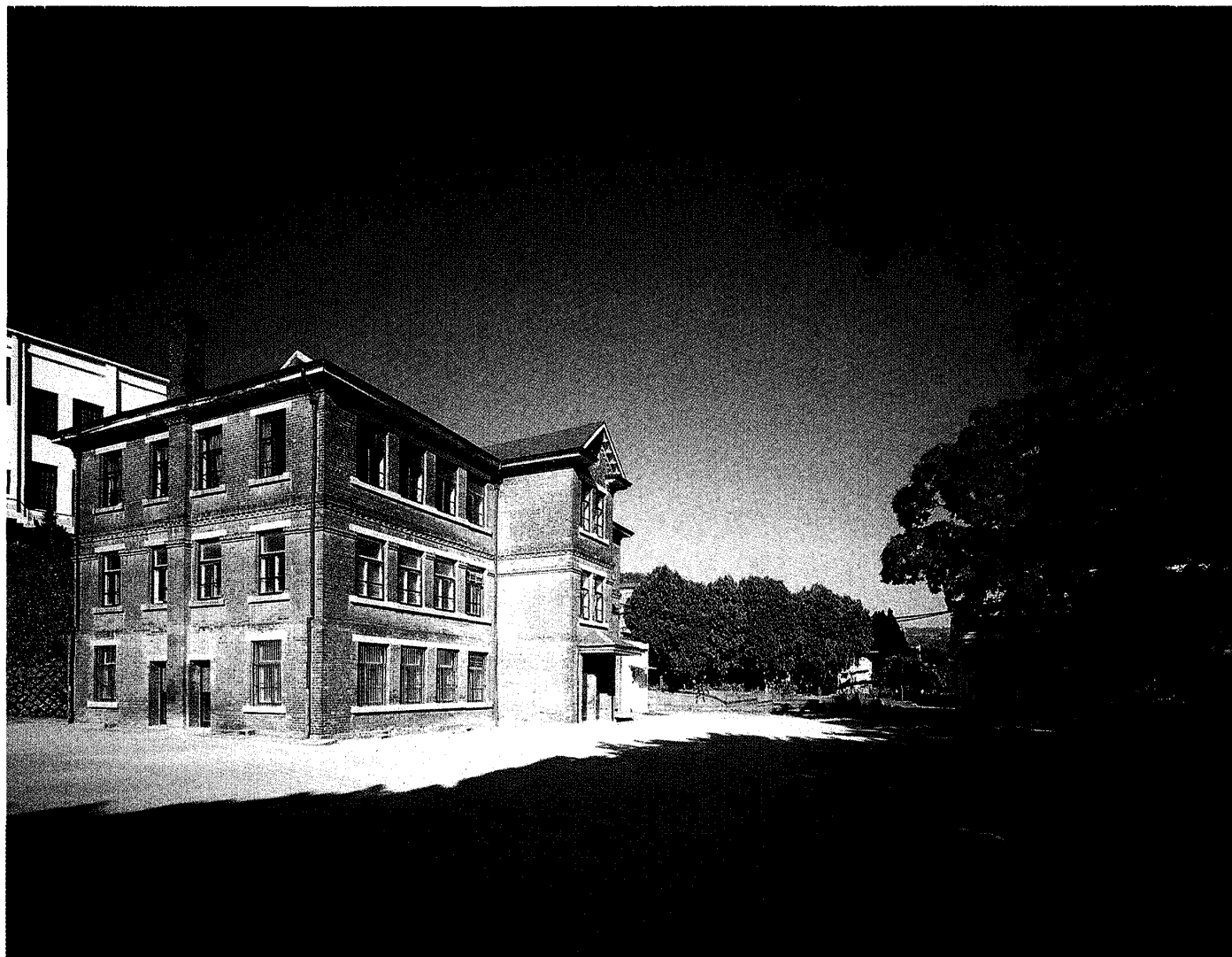
作品一 5 培花女子大学記念館全景（妻面と正面）



作品一 7 培花女子大学記念館とソウル都心遠景



作品一 8 培花女子大学女子学生館とソウル都心遠景



作品－9 女子高等学校グラウンドと右手の幼稚園

ここに披瀝する写真作品全9葉の建築は、韓国ソウル市内の都心付近に現存している。いずれも赤煉瓦を外観に^{あらわ}とした西洋風の歴史的な様式を基調とする建築物である。これらの撮影日は2007年11月3日（土）と翌4日（日）の両日であった。作品－1のみが第2日である11日4日の午前中で、それ以外の全作品群は撮影初日の11日3日に終日を費やして4×5インチ（しのご）カラーポジフィルムにて撮影した。

本稿の作品発表において正式な題名を「身近な赤煉瓦」とした理由は、以下の2点に及ぶ。理由の第1点は、作品－1に掲げた天道教中央大教堂¹⁾の設計者が静岡県出身であり、わたくしの故郷である愛知県東部にもその作品が公共建築として現役であるため以前からわたし自身が身近に感じてきたと言う事実に基づく。ただしソウルの当該建築作品を大型写真機（ビュー・カメラ）で撮影し、さらに詳細に踏査する機会は、今回が初めてであった。

加えて「身近な赤煉瓦」の2点目の理由は、本学にとって最も親しく近い姉妹校・ソウルの培花（ベンハー）女子大学キャンパス内に歴史的な赤煉瓦建築が4棟も現存しているという事実に基づいている。本学関係者にとっては、この第2の理由こそが正に“身近さ”の実感を覚える基となろう。それらの建築物群は、過半の施設が現役であると判断される。不肖な筆者

は、「灯台下暗し」の感を強くした。実のところ、わたし自身は、ちょうど20年目の訪韓であったが、培花女子大学にこれほど良好な煉瓦造建築群が残されているとは全く知らずに出かけた。なお前回1987年に韓国を訪れた際の目的は、ソウルオリンピックの大会施設建設状況を見学するための旅であった。ちょうど本年2008年に北京で開催されるオリンピックは、1988年のソウルオリンピックから20年目にあたる。

培花女子大学の歴史的煉瓦造建築物を拝見しよう。目視ながら組積単材^{そせきたんざい}である煉瓦1本1本を、わたくしなりに精査した結果、4棟の煉瓦建築のうち最も高い位置に建つ女子高等学校の校舎は機械抜き成形による近代的大量生産の様相を呈していた。したがって少し竣工年が新しいものと類推される。これに比較すると中央部の記念館は、女子高校の校舎よりも年代が古い可能性が考えられる。その根拠は積み上げられている赤煉瓦が手抜き成形法で加工された手づくり煉瓦だからである。また同記念館の屋根の形状は、日本では入母屋^{いりもや}と呼ばれる東洋的なデザインである。作品-7の右手遠景に望む都心市街地に、現在の国立民俗博物館・旧王宮である景福宮跡の一角が見える。

その記念館よりも、おそらく更に古いと見られる建物が、グランドの高さに建つ旧施設である。この使用煉瓦は赤い色調を呈するものだけでなく、黒色の煉瓦も含まれている。黒色煉瓦は西洋建築技術が導入される以前からアジア一帯で焼成されてきた素材なのである。

本稿の初校時に突然、甚だ悲しい知らせが入った。ソウルの南大門の全焼事件²⁾である。本年で竣工後610年を迎えるはずの歴史的な宝物・財産・誇りであった。これまで1000棟前後に及ぶ日本国内の歴史的な木造建築の実測調査に関与してきた筆者としては残念でならない。昨年の初秋にソウルで目にし、撮影した南大門ライトアップの姿が見納めとなってしまった。韓国や中国の建築技術が日本建築の淵源であったろうに、その証人の一人を失った。

- 1) 『世界の都市・名建築マップ 東アジア・東南アジア編』東京大学生産技術研究所 藤森研究室、大成建設、1994年1月、P-10。

『アジアの都市と建築』加藤祐三、鹿島出版会、1986年12月25日、PP.315 - 316

- 2) 「南大門が炎上、崩壊／韓国の国宝 放火の可能性」。『北海道新聞』北海道新聞社、北海道新聞社、2008年（平成20年）2月11日

「69歳男、放火認める 南大門全焼」。『北海道新聞』北海道新聞社、北海道新聞社、2008年（平成20年）2月12日

「放火の男／下見2回／南大門全焼」。『北海道新聞』北海道新聞社、北海道新聞社、2008年（平成20年）2月14日

「韓国の国宝「南大門」は一晩で焼失…／時計台、赤れんが庁舎、豊平館／札幌の重文 防火大丈夫？／時計台 夜間も警備員常駐／消防 「通報、初期消火を」」。『北海道新聞』北海道新聞社、北海道新聞社、2008年（平成20年）2月16日